

メルロ＝ポンティ・サークル第20回大会プログラム

日時: 2014年9月20日(土) 10:30 -17:30

場所: 大阪大学人間科学研究科・人間科学部 / 会員控え室 本館42教室

共催: 大阪大学大学院人間科学研究科・基礎人間科学講座・現代思想専攻

個人発表

本館41教室 司会: 國領佳樹

10:30-11:15

酒井麻依子(立命館大学)

現れる他者・消える他者—ソルボンヌ講義「他者経験」をめぐる

11:15-12:00

小倉拓也(大阪大学)

担われなければならない肉—故メルロ＝ポンティへの老ドゥルーズの最後の一瞥をめぐる

本館44教室 司会: 八幡恵一

10:30-11:15

佐野泰之(京都大学)

メルロ＝ポンティにおける〈語られた言葉〉の問題

11:15-12:00

赤阪辰太郎(大阪大学)

サルトルを読むメルロ＝ポンティ『文学とは何か』をめぐる

(12:00-13:00 休憩)

本館41教室 司会: 澤田哲生

13:00-13:45

玉地雅浩(藍野大学)

他者とのやり取りを支えるもの—メルロ＝ポンティのリズムから考える

13:45-14:30

篠塚友香子(大阪大学)

精神科病院における看護師と患者の空間経験

本館44教室 司会: 山下尚一

13:00-13:45

横田仁(首都大学東京)

メルロ＝ポンティにおける表現としての哲学—ベルクソンの非改宗の解釈を通じて

13:45-14:30

西岡けいこ(香川大学)

「絵画の媒体性」と「まなざしの歴史性」

(14:40-15:00 本館51教室 ビジネス・ミーティング)

15:00-17:30 本館51教室

20周年記念シンポジウム

メルロ＝ポンティ研究のこれまでとこれから

司会 松葉祥一(神戸市看護大学)

趣旨

日本メルロ＝ポンティ・サークルの活動は、今年度の大会をもって、20周年を迎える。1993年の設立から今日までの20年のあいだに、サークルでは専門的かつ学際的な研究が数多く発表され、2008年には、哲学者の生誕100周年を記念する国際シンポジウムも開催された。加賀野井氏が提題で証言されるとおり、わが国ではすでに早い時期からメルロ＝ポンティの著作、論文、草稿が翻訳され、水準の高い研究環境が整備されていた。先人たちの高水準の研究に支えられ、充実した研究状況にあるメルロ＝ポンティ・サークルの活動には、今後さらなる発展が期待される。

それでは、発展の20年を経て、今後、日本のメルロ＝ポンティ研究はどのような方向に進んでいくのだろうか。あるいは、どのような方向に進むべきなのだろうか。そしてそのためには、どのような発想が必要なのだろうか。今大会の20周年記念シンポジウムでは、3名の提題者が、それぞれの観点から、メルロ＝ポンティ研究のこれまでとこれからを検討する。

シンポジウムの趣旨として、少なくとも次の二点を、今後20年のメルロ＝ポンティ研究の動向と発展の方向性として確認しておきたい。

まず、この20年のあいだに、メルロ＝ポンティが遺した講義草稿が続々と公刊されていることが挙げられる。これらの草稿群は、彼の中期・後期思想の理解を深化するうえで、きわめて重要なテキストである。そればかりではなく、哲学者の前期(『行動の構造』、『知覚の現象学』、『ヒューマニズムとテロル』、等々)の仕事も考察し直す機会も与えてくれるはずである。さらに、そこから浮かび上がるいくつかの概念は、メルロ＝ポンティと彼に続く世代の思想家たち(アンリ・マルティネイ、ジゼラ・パンコフ、ジャン＝フランソワ・リオタール)のつながりを明らかにしてくれるだろう。後期思想について提題者の澤田氏がある一定の見解を示された後、合田氏の提題がメルロ＝ポンティに続く思想家たちに触れつつ、この現象学者のポテンシャルを引き出してくれるはずである。

次に見落としてはならないのは、研究の学際化である。この20年のあいだに、メルロ＝ポンティの仕事は、哲学分野にとどまらず、臨床、看護、認知科学、等々の領域でも読まれるようになった。こうした研究の学際化は、哲学者の思索のしなやかさをまさに物語っている。このアプローチも、今後、いっそうの発展と展開を見せるはずであり、シンポジウムにおける議論の一翼を担うはずである。(松葉祥一)

ゲシュタルト概念の変遷から見るメルロ＝ポンティ研究の流れ— 知覚・時空間・言語・記号性・肉 —

わが国におけるメルロ＝ポンティ研究は、木田元・滝浦静雄両氏に代表される第一世代が草分けとなり、やがて私どももその末席に連なる第二世代が続き、今や第三もしくは第四世代がこれを担うようになっている。私に与えられた役割は、こうしたメルロ＝ポンティ研究の足跡を、彼の思索の深化を描き出しつつ振り返るとともに、そこから新たな可能性を考えてみることだが、今回はそれを行なうための狂言回しの役割を「ゲシュタルト」概念に託してみようと考えた。

メルロ＝ポンティ自身はこの概念を、『行動の構造』まではゲシュタルト心理学に準拠したまま用いているが、やがて『知覚の現象学』になると、知覚の「図-地」関係や現象学的「射影」の説明、あるいは時間論の中核部分に応用してゆき、さらに『シーニュ』以降は、これをソシユールのネガティブな差異へと繋いでゆく。こうして後期の「肉」の存在論を展開するにあたり、彼はこの概念を「見えるもの」を支える「見えないもの」の説明原理へと深めてゆくことになるだろう。

ここから明らかにしたいのは、ゲシュタルト概念が胚胎する「記号性」や「包蔵性」といった豊かな可能性であり、これを随所に応用したメルロ＝ポンティの共存的かつノスタルジックな思考のスタイルである。

ほつれと浸食—後期メルロ＝ポンティの始まりと展開についての一考察

メルロ＝ポンティは、1956-57年度の「自然という概念」と題された講義の最終回で、ホワイトヘッドの『自然という概念』を紹介している。ここで抽出された概念が、「エレメント(élément)」と「浸食(empiètement/overlapping)」である。前者は、知覚対象の最も微細でしなやかな側面(「ほつれ」、「きれはし」)を指し示し、後者は、前者が絶えず他の時間と空間に流れこむ現象を表わしている。この二つの概念は、後期のなかでもとりわけ晩年のメルロ＝ポンティの思索(1960-61年度のクローデル講義とシモン講義、『見えるものと見えないもの』所収の「問いかげと直観」、「キアスム—交叉配列」、さらには同時期の研究ノート)において、実り豊かな展開を見せる。

さらに、両概念の考察と並行して、メルロ＝ポンティは、「浸食」という現象における知覚主体の逆説的な在り方、とりわけ、知覚行為に含まれる「(中心)幻想」、「幻影」、「錯覚」の役割を模索している。このシンポジウムでは、「エレメント」と「浸食」を糸口として、そこから展開される後期メルロ＝ポンティの思索の軌跡をたどり直すことで、後期思想の可能性の一端を提示できればと考えている。

未完の身体—メルロ＝ポンティ、ジゼラ・パンコフ、そして

すでに30余年の歳月が経ってしまったが、かつてメルロ＝ポンティの著作と日々向き合っていたとき、発表者の心中に去来していたのは、知覚身体は「ルビド」身体に延長されねばならないというメルロ＝ポンティの言葉をどう解釈すればよいのか、アントナン・アルトーの名をメルロ＝ポンティが書き記し、ジャン・デュビュフェ論に彼が言及したことの意味をどう考えればよいのか——そのような一連の問いであった。その後、発表者が訳者の一人となったジャン＝フランソワ・リオタールの『ディスクール・フィギュール』はそれにひとつの回答を与えるものであったらうし、また、『生活世界の諸制度』(Les institutions du monde de la vie, Millon, 2008)の著者ギイ＝フェリックス・デュポルタイユ(Guy-Félix Duportail)も、メルロ＝ポンティの遺稿とラカンとのありうべき対話の想像的構築というかたちでこの問いに答えようとしているが、今回の発表では、ドイツ生まれの精神科医ジゼラ・パンコフ(Gisela Pankow, 1912-1998)の仕事を主に取り上げてみたい。アンリ・マルティネイの友人で制度論的心理療法の展開にも大きく貢献した。邦訳ははまだ『身体像の回復』(岩崎学術出版会, 1970年)しかなく、メルロ＝ポンティとの思想的関連についてもほとんど語られていないが、特に統合失調症における身体像の造形・解体・変形・修復をめぐる彼女の思考と実践は、メルロ＝ポンティの著述の解釈的可能性を少なからず刺激するものと思われる。

全体討議

18:00～

懇親会

連絡先：メルロ＝ポンティ・サークル事務局
〒651-21 神戸市西区学園西町 3-4 神戸市看護大学
Tel: 078-794-8041(Office)
Fax: 020-4668-5122
(メールの場合) GHA01473@nifty.ne.jp